

巻頭言：すべての子どもが本に親しむことができるまちを目指して	1
特集：神奈川県図書館協会 この1年の動き	
研修委員会 地域資料委員会	2
大学図書館協力委員会 広報委員会	3
事務局からの報告 「令和3年度 神奈川県図書館協会講演会開催報告」	4, 5
連載：わたしのイチオシ「神奈川県立保健福祉大学 実践教育センター図書室」	6

すべての子どもが本に親しむことができるまちを目指して

神奈川県図書館協会 広報委員会委員長（藤沢市総合市民図書館長）

市川 雅之

2021年4月より神奈川県図書館協会広報委員会委員長に就任しております、藤沢市総合市民図書館長の市川雅之です。どうぞよろしくお願いいたします。

この2年余り、世の中は新型コロナウイルスに振り回され、藤沢市の図書館においては閲覧席数を減らしたり、おはなし会などの参加人数を制限したりする中、市民が必要としている情報・居場所の提供に努めています。

さて藤沢市では、すべての子どもたちが、本に出会い、言葉に触れ、本に親しむことができる環境を整えるために、2006年3月に第1次藤沢市子ども読書活動推進計画を策定しました。そして2021年3月には、その第4次計画となる「ふじさわ子ども読書プラン2025」を策定しました。

第1次計画から第3次計画までは、「家庭」「学校」「地域」をつなぎ、地域社会全体で子どもの読書環境を見守る仕組みづくりに取り組んできたところです。そして今回の改定にあたっては、基本的な考え方を踏襲しながら、改定作業の中で見

えてきた課題（読書離れや、さまざまなメディアの普及に伴う読書環境の変化等）を踏まえ、4つの目標（①すべての子どもを「読書」の楽しさへ誘う ②子どもの「読む力」を育み、伸ばす ③地域のちからをつなげる ④みんなで子どもの「読書」を見守る）のもと、子どもの読書活動の推進に取り組んでいるところです。

新型コロナウイルスに関しては、まだまだ先の見えない状況が続いていますが、これからも子どもたちと良い本との出会いを、しっかりとサポートしていきたいと思います。

最後に藤沢ゆかりの絵本作家かこさとしさんの言葉を紹介いたします。

「子どもたちは、ちゃんと自分の目で見て、自分の頭で考え、自分の力で判断し行動する賢さを持つようになってほしい。その手伝いをするのなら、死にはぐれた意味もあるかもしれない。」（『かこさとしの世界』2019年 平凡社

P.2より引用）

研修委員会

令和3年度は、コロナ禍の影響から見学会や集合研修を行うことができず、回数についても例年より少なくなっていました。各委員が工夫し、配信や資料掲載型など新たな手法での研修会を開催しました。

詳しい報告はホームページ「研修活動」をご覧ください。[\(https://www.kanagawa-la.jp/\)](https://www.kanagawa-la.jp/)

回数	研修テーマ・講師（敬称略）	開催日
第1回	神奈川県子ども読書活動推進フォーラム（神奈川県立図書館共催） 講演：「人間になるために書く」 講師：二宮敦人氏 事例発表：「学校図書館からわくわくを発信！～自修館の文化委員会によるオンラインイベントの実践報告～」：自修館中等教育学校図書館 Zoom開催	11/28
第2回	神奈川大学図書館におけるみなとみらいキャンパス開設等への取組みについて 講師：小池孝昌氏・会田俊輔氏 小松屋史氏 Zoom開催	12/26
第3回	図書館資料の補修に関する情報交換会 Zoom開催	1/28
第4回	デジタルアーカイブの活用研修会 資料掲載型研修会	2/8～ 3/8
第5回	コロナ禍における児童サービス 資料掲載型研修会	2/25～ 3/24
第6回	電子書籍サービスの導入及び運用について 資料掲載型研修会	3/1～ 3/31

研修会開催に際し、ご協力くださいました皆様方に、改めてお礼を申し上げます。

[委員長 鎌倉市中央図書館 朴澤 徹範]

地域資料委員会

地域資料委員会は、その前身を郷土・出版委員会といい、郷土資料集成などの編集発行を行ってきましたが、平成27年度から名称・目的を変更し地域資料委員会として活動を開始しました。

【令和3年度の活動】

令和2年3月から続く新型コロナウイルス緊急事態宣言やまん延防止等重点措置に伴い、図書館の臨時休館や利用制限等が続き、公共図書館の使命を果たせない状況にあつて、各館におかれましても多大なご苦勞があったことと思います。

令和3年度の地域資料委員会としては、これらの事情から活動開始が大幅に遅れ、前年度の検討事項を踏まえて活動を組み立て直すことから始めなくてはなりません。委員会の会議も対面では行えず、Zoom開催となりました。はじめての顔合わせとなる委員もいましたが、委員会としての期待に応えるべく前向きな議論ができました。

本委員会の目的である「地域資料に関わるサービスの調査研究のための諸事業」として、過去には映像資料のDVD化などを行ってきましたが、地域資料保存・公開に関わるサービスについては、各館の状況は大きく異なっています。また、デジタル化による資料公開のニーズも高まっています。

そこで、今後の活動として、各館一押しの地域資料コレクションを協会ホームページ上で公開することを検討しており、まずは資料の所蔵・公開状況などの事前調査を行いたいと考えています。

任期による委員の入れ替わりがある中で委員会の活動は難しさもありますが、活動の中で視野が広がり、共通課題への気付きや問題解決につながる糸口を発見することもできるのではと感じています。

引き続きコロナ禍が懸念される場所ですが、まずは各委員間での情報交流等を図り、着実な活動をしていきたいと考えております。

[委員長 小田原市立中央図書館 佐次 安一]

大学図書館協力委員会

大学図書館協力委員会は、大学図書館に関する調査・研究と、相互協力事業の推進を目的としています。令和3・4年度は、調査研究テーマとして「with コロナ、after コロナで止まらない図書館づくり／取り組み」を掲げ、今年度は7月に第1回、11月に第2回を開催しました。第3回は3月に開催予定です。喫緊の課題である新型コロナウイルス対応について、各館の課題や取り組みを情報共有し、意見交換を行っております。

方法としては、各大学より質問事項を出していただき、その回答を事前にまとめた資料をもとに話し合うというもので、新型コロナウイルス感染防止のため、Zoomを用いたオンライン会議の形式で行っています。

大学図書館という括りはありますが、参加している各大学は国立・公立・私立と設立母体が異なり、構成する学部も異なります。こういったバックボーンが異なる大学の取り組み事例は、日常業務において参考となっています。特に新型コロナウイルスに対する取り組みは、ほぼ準備期間なしに着手しなければならない事態でしたので、大いに参考となっています。

また、「電子資料の取扱いについて（選書基準や資産登録の有無など）」「利用者ガイダンスの取り組みについて」「業務委託の状況について」「オープンサイエンスについて」「授業目的公衆送信補償金等管理協会(SARTRAS)への加盟状況について」「新たに図書館に配属された職員への研修体制について」など、幅広い情報共有・意見交換がなされました。

今後は、まだ予断を許さない新型コロナウイルスへの対応を筆頭に、大学図書館がもつさまざまな課題について、調査・研究・相互協力を進めていきたいと考えております。

[委員長 関東学院大学図書館 百瀬 幸子]

広報委員会

広報委員会では、11月1日～30日に開催された「第23回 図書館総合展 ONLINE_plus」へのウェブサイトブースページ（ブース展示）にあたり、「神奈川県図書館協会リーフレット」の作成や各加盟館から「PRしたい活動」「コロナ禍で楽しむ図書館コンテンツ」等の募集を行いました。また、協会報・図書館だよりにつきましては、第275号（7月1日）、第276号（10月1日）、第277号（1月1日）、第278号（4月1日予定）を発行いたしました。

原稿執筆等、ご協力いただいた加盟館の皆様には、あらためまして感謝とお礼を申し上げます。

令和3年度に開催した広報委員会は、次のとおりです。

日付	開催方法	議題内容
第1回 (9/8)	書面	図書館総合展、リーフレット作成について他
第2回 (10/6)	オンライン	図書館総合展出展内容の確認について他
第3回 (12/14)	オンライン	図書館総合展報告、広報委員会活動について他
第4回 (3/23)	オンライン	図書館の魅力発信、新たな取り組み、今後の神図協HPのあり方について他

今後も広報委員会では、「図書館の魅力発信」、「新たな取り組み」について協議を重ね、神奈川県図書館協会の活動をPRするにあたり、新型コロナウイルス感染拡大が続く状況で、誰を対象に、どのようにアプローチしていくか、また感染拡大が収束することを見据えての広報活動を検討していきます。

図書館総合展についても、今年度は初めてのオンライン開催、出展参加ということもあり、戸惑った部分もありましたが、今年度の課題、反省点を踏まえ、次年度の出展に向けて、意見交換を行っていきたいと考えております。

[委員長 藤沢市総合市民図書館 市川 雅之]

事務局からの報告

令和3年度 神奈川県図書館協会講演会開催報告

令和3年度神奈川県図書館協会講演会が、1月21日(金曜日)にZoomによるオンラインにて開催されました。

講演会は、『マイノリティデザイン』の著者で、世界ゆるスポーツ協会代表理事/コピーライターでいらっしゃる澤田智洋氏より、「弱さから学ぶアイデアのつくり方 ～誰もが情報にアクセスできる社会をめざして～」と題してお話していただきました。

【講演会概要】

1. これまでの仕事

今僕は広告会社に勤めていますが、同時にスポーツと福祉の事業を手掛けています。

例えば、「ダークナイトライジング」という映画の「伝説が、壮絶に、終わる」というコピーを書いたり、CMを作ったりしていました。その他に、高知県のクリエイティブディレクションに8年ほど携わっています。人口流出が激しく、移住者数を少しでも増やしたいという狙いがあり、家族のような人たちがいるから安心して移住してくださいという思いをこめて「高知家」という言葉を提案しました。

2. ターニングポイント

息子は2013年に先天的に視覚障害を持って生まれてきました。息子は全盲で、かつ軽度の知的障害も有しており、重複障害をもっています。まさか自分たちの子供が目が見えない状態で生まれてくるとは、全く予想していませんでした。

僕はそれまで障害のある人と接したことがなく、知識が全くなかったので、視覚障害に限らず自閉症に関する本や障害全般、福祉に関わる本を読み漁りました。そして、障害者と言ってみてもいろんな人がいるんだという当たり前のことに気づきました。ただ、古い文献も多かったため、今度は本に書かれていない事実を求めて、実際に障害のある方に会いに行きました。そこで僕にとって希望の持てる話を数多く得ることになりました。

3. 障害を起点にした発明品

ライターやストロー、カーディガンなどは障害のある人を起点に発明されたという説があります。例えば、第1次世界対戦で片腕を失ったアメリカ兵が、片腕でも火を起こせるように開発されたのがライターです。は、障害のある人は社会が守り保護すべき対象という偏見がありましたが、もしかしたら障害がある人こそが、何か新しい発明や、新しい未来への活路を開いてくれる存在なのかもしれないと希望が湧いてきました。

4. 医学モデルと社会モデル

もう一つ希望になった話は、「医学モデル」と「社会モデル」という考え方です。

医学モデルとは、例えば車椅子の方が段差でつまづいて進めない時、車椅子のあなたに責任があるという考え方です。一方、社会モデルとは、段差を作った社会に責任があるという考え方です。社会モデルにおいては車椅子の人を変えるのではなく、社会の方が変わる必要があるということです。

5. マイノリティデザイン

障害のある方との対話を通じて、弱さというものに着目し、全ての人がある意味では弱さを有しているマイノリティなのではないかと気がつきました。僕は、マイノリティとは社会とのミスマッチが生じているすべての人と定義しています。この弱さ、あるいはマイノリティ性から世界を良くする仕事がしたいと思いました。僕はこのような仕事をマイノリティデザインと呼んでいます。

6. 義足女性のマイノリティデザイン

いくつか事例をご紹介します。障害のある当事者に会いに行くうちに仲良くなった義足の女性達が、「義足をもっと見せたい」と一様に口を揃えて言いました。義足は福祉機器、あるいは病气や事故の象徴となりうるもので、基本的には隠すという風潮が続いてきました。

見せたいというニーズがあるのであれば、それに答えたいと思い、2015年から「切断ヴィーナスショー」という名前でファッションショーを開催しています。

この仕事においては、福祉機器をファッションアイテムという風に再解釈しています。それと同時に義足の女性達も、障害のある女性ではなく、今までいなかった形のファッションモデルと再解釈しました。そうすることで、これまで世界になかった魅力が浮かび上がってきます。

7. 「視覚障害者が信号を渡れない」のマイノリティデザイン

2例目は、視覚障害者を起点に始めたプロジェクトです。音響ガイダンス付きの信号機は、設置率がわずか10%ほどで、設置されていても近隣の迷惑になるという理由で夜間は音が止んでしまいます。そこでNIN_NIN(ニンニン)というロボットを作りました。このロボットは視覚障害者の肩に乗せて、音声でアテンドしてくれます。

実はこのロボット、中に人が入っています。起動すると視覚をシェアできる人と繋がり、その人はロボットが映す映像を見ながら遠隔でアテンドするのです。目が不自由な方と、それ以外の身体部位が不自由な方が体の一部を交換し合う設計で、体をシェアし合うボディシェアリングロボットといます。ただのロボットではなく、あくまで人と人との関係性がメインであることを大事にしました。

8. 世界ゆるスポーツ協会

世界ゆるスポーツ協会は、スポーツマイノリティを世界からなくすというのがミッションです。これまで100競技ほど新しいスポーツを開発してきました。

例えば「いもむしラグビー」。これはいもむしウェアを選手全員が着用し、這ったり転がったりしてプレイします。この競技はパラ選手であるけれど車椅子ユーザーというスポーツマイノリティを起点に作ったのですが、普段這う事に慣れている車椅子ユーザーが有利になりました。いわゆる二足歩行している人と車椅子ユーザーの逆転現象が起こるスポーツが誕生しました。

また、心疾患のある友人を起点に作った「500歩サッカー」は、選手がデバイスを装着してプレイするサッカーで、1歩歩くごとに500あるデバイスの数字が1つつ減っていき、0になったら退場になります。立ち止まると4秒目から1秒につき1歩回復するというルールを設けています。

つまり、休むことがプレイに繋がるという逆転の発想です。皆こまめに休むので、心疾患がある人が混ざっていても分かりません。この競技は体力に自信のない40代以上の方にも人気です。

標語などで心のバリアフリーを訴えてもなかなか届きにくいですが、体感的に理解が進むという点でスポーツは極めて適しています。

9. さいごに

ブラインドサッカーの大会に、「見えない、そんだけ」というコピーを書きました。

実はこの「そんだけ精神」が大事で、一度弱さの質を軽くすることによって、自分の弱さと対等に向き合いやすくなります。

また、生産性だけではなく、他者に対してどのような影響を与えるかということも、やはり人が生きるうえでとても重要な価値ではないかと思えます。

弱さあるいはマイノリティ性という全ての人が持っていて、なおかつあまり有効活用されてこなかった特性を社会と接続し社会に生かすことで、その人が持っている弱さを祝福し、その人自体の存在を肯定したいという思いで、マイノリティデザインという仕事をしています。

図書館は様々な人がアクセスし、情報が集積する場所です。僕は地域に欠かせない存在だと思っています。既存の図書館に対して、アクセシビリティを含め様々な面でアクセスしづらいと感じている図書館マイノリティの人がいるかもしれません。そのような起点から練りなおし、新しい図書館の形が生まれていくのではないかと思います。

連載 わたしのイチオシ

公立大学法人神奈川県立保健福祉大学 実践教育センター図書室 ～ 専門図書館ならではの蔵書構成 学びを支える特集のラインナップ ～

実践教育センターは、保健・医療・福祉分野で働く方々の一層のレベルアップを図る現任者教育機関です。看護・介護の教育担当者養成課程、認定看護管理者や感染管理認定看護師の教育課程、栄養ケア・マネジメントや、多職種連携推進の課程を開講しています。その他、様々な研修や、広く県民の方に向けた公開講座も行っています。

実践教育センター図書室には、そういった教育課程や研修、講座を支える蔵書が豊富に揃っています。図書の60%が医学・看護学分野、30%が社会福祉を含む社会科学分野という構成です。特に看護に関する図書は冊数も多いので、「日本看護協会看護学図書分類表」、通称N分類に基づき、図書館職員にはおなじみの日本十進分類とは別に書架に並んでいます。



同じ校舎にあるよこはま看護専門学校の図書室も兼ねていることから、看護師国家試験に関する図書も多くあります。毎年2月の国家試験の前には国家試験対策の特集コーナーを設置し、学生の受験を応援しています。他にも、図書委員の上級生や教員の意見を参考に、下級生へ向けて看護実習前におすすめの資料を展示したり、グループ演習に必要な薬剤の資料をまとめておいたり、特集コーナーは学生の学びを支援するテーマで組むことも多くあります。

実践教育センターでは、上記でもあげたように感染管理認定看護師教育課程があることから、以前から感染症やその管理に関する資料が充実していました。

そこに、新型コロナウイルスの流行を受けて、コロナ関係の資料を積極的に加えました。また、感染拡大防止のため、多くの授業をオンラインに変更して行くこととなった際には、オンライン授業やテレワークに関する資料を新たに揃えました。それぞれ、最新の資料で特集コーナーを設置し、多くの教員、学生に資料を利用してもらうことができました。



自閉症や、介護についてなど、研修や、公開講座のテーマに合わせて特集を組むこともあります。今後も、令和4年度開催予定の講座に関連した、在宅医療や訪問看護について、教職員の注目度の高いヤングケアラーについて、新刊の中から闘病記を集めたものなど、様々な特集を準備しているところです。専門書が多い当図書室ですが、気軽に幅広く資料を活用していただくために、工夫を続けたいと考えています。



(神奈川県立保健福祉大学 実践教育センター
図書室 司書 青山香澄)